教育活動としてのエディターシップとキャリア教育の架橋

中村 純

一、はじめに

（一）本稿の概要

筆者は、芸術大学における文芸表現教育に携わるまで、出版社で編集者としての経験を経て、私学女子校での中高一貫校で国語科教育、関西圏の複数の私立大学でキャリア教育に携わってきた。現在は、編集・執筆業の実務家教員として、文芸表現、エディターシップ（編集）を学生たちと共に学んでいる。また、国家資格キャリアコンサルタント、キャリアコンサルティング技能士として、学生たちをいかにして社会に架橋するかという課題に日々向き合っている。

本稿では、筆者が芸術大学に専任講師として着任した二〇一九年度～二〇二〇年度の二年間の教育と、学生たちの変容について考察していきたいと思う。

（二）エディターシップとは

筆者は、エディターシップ・編集者の役割を次のように定義する。

第一に「いまだ存在していないものを作品にする手助け＝作品を生み出す表現者とともに構想を練り、対象読者を設定し企画書を制作する。企画が稟議決裁されたのちは、原稿依頼、原稿入手、編集制作の工程のディレクターをし、作品を世に生み出し、読者に届ける役割」

第二に「すでに存在しているものを順序だて、編み、新しい価値や文脈を生み出して、文化を創造をする役割」

出版という狭義の範囲でエディターシップを捉えるならば、雑誌やウェブ媒体や教科書等の編集者は、同時代へのアクション、ムーヴメントとしての発信を生み出す者である。書籍や辞書の編集者は、同時代に確かな検証を経た出版物を提示し、未来へ遺す価値を創造する者である。創作等の作品の編集者であれば、孤立した個々の作家や作品を社会の文脈に位置づける役割をする。混沌とし様々な価値が錯綜する時代で、編集者が生み出す文脈は、私たちが現在足を下ろしている時代の現在地を確認する一助にはなるかもしれない。

そうした役割をもとにエディターシップを考察すると、放送局、新聞社などのメディアにも同様の役割を担う方たちがある。アートの分野であればキュレーターが同様の役割である。街づくりで、すでにある地域の文化に新たな文脈を作り発信する方は、地域を編集している。国家や自治体レベルでは、市民の話を聴き課題解決するために、これまでを踏まえた上で新たな文脈を作り、政策立案、議員立法をする活動のなかにもエディターシップを捉えることができる。

キャリアカウンセリングは、クライアントの自己概念（自分は何者であるかという自己同一性）の成長の伴走者となり、クライアントの未来をともにデザインし、そのナラティブをもとに新しい未来の物語を共に創り出し、クライアントを社会に架橋する。そういった意味では、私自身は、キャリアコンサルタントとしても、エディターシップと相違ない活動を実践している。

（三）二つの戸惑いから課題設定へ

筆者が大学でキャリア教育に携わるようになったのは二〇一六年からである。高校でのキャリア教育は一九九七年頃から断続的に実施していた。高校生、大学生と関わるなかで戸惑いがある。時代の変遷や学校や地域の違いもあり当然一様の戸惑いではない。圧倒的に異なるのは、生徒・学生の経験知の格差、教育格差、経済格差、ジェンダー格差である。ここではそのことがテーマではないので紙幅は費やさないが、編集者が対象から課題設定をするのと同様に、授業実践もキャリア教育も、生徒・学生とともに歩むものである。著者が変われば編集する本が変わるように、当然授業も変幻自在に編集しなければならない。

ここでは、二〇一九年に着任した現・京都芸術大学（旧京都造形芸術大学）芸術学部文芸表現学科で向き合った二つの戸惑いから、学生たちを社会に架橋する授業の課題をどのように設定したか述べてみたい。

一つ目の戸惑いは、学生たちが学校社会と社会人のいる実社会を別物のように考えていることだった。

学生たちは大学教職員やアルバイト先以外の大人、社会人と接する機会がほぼ皆無に等しく、ましてや子どもに関わる機会も少ない。

二〇一九年度からの勤務先の京都芸術大学には、研究者の教員のほか、アートやデザイン、編集、文筆に携わるような実務家教員も多く、日々の授業カリキュラムの中で、実務家教員の仕事を通じて社会を垣間見ることができる。し

かし、就職活動、社会人や仕事について考えるという三年生の段階になると、教職員の専門範疇ではない未知の分野への想像力が及びにくい。そして、社会に出ることや大人になることを怖がる学生の話を聴く機会が多くあった。この「怖れ」はどこから来るのか。彼らの思う「社会」とはどのようなものだろう。そう思って関わることが多々ある。

現在関わっている社会の手触りが、ゲームや限られたジャンルの本の虚構の中、大学の人間関係、アルバイト先といった大変狭いところにしかないのなら、「他者」への実感、想像力は限定される。

そうであるならば、文芸や芸術が自分に閉じられた表現になるに違いない。社会や歴史、創るべき未来の中での自己といった大きな文脈で表現をとらえること。それはリベラルアーツや専門教育の中でも実践できるが、同時に、卒業時に戸惑わないように社会人基礎力を育むことを、自らの教育課題に設定した。

社会実装、SDGsという、京都芸術大学でたびたび目にするキーワードは、まさに学生自身が実社会でどう生きるか、どう表現し社会を変革していくか、という実践を問われるものであった。大学は所属学科を問わず複数のプロジェクトの参加者を募集している。これこそ、まさにエディターシップの体現である。

所属学科では、こうした授業に積極的に参加する学生が比較的限られているのは、書物を読むことと自身が書くことは、孤独の中でひとりで実践することだからだと考えている。しかし、学生たちが「ひとり」の殻を破り、他者や社会を発見することができたら飛躍的な成長をするという確信があった。

孤独は突き詰めていくと他者につながっている。それは孤立や自分にしか関心がないということとは違う。孤独は自己尊重と他者尊重へとつながる。

二つ目の戸惑いは、大学のゼミの担当分野を「編集」と依頼されたことである。国語科教員第一種免許や、国家資格キャリアコンサルタント・キャリアコンサルティング技能士の資格で教員として働くときは、先人たちの膨大な実践、同分野を研究・実践してきた同僚、仲間たちとピアサポートしながら授業実践することができた。大学の教員は、それぞれの専門分野を開拓する者で、同僚は互いの専門を深くは理解していない。ことに実務家教員のそれは、道なき道をひとり往くものであった。筆者は日本出版学会に所属しているが、研究者の論文と芸術大学での実務家教員による演習授業、専門学校での実技実務講座は、やはり性格が異なる。

国語科教育では「読む・話す・聴く・書く」といった言語活動や文芸教育の膨大な蓄積があった。筆者は慶応義塾大学での専門は国文学、早稲田大学の客員研究員としてジェンダー研究所に属していた。私は編集者という実務家に相違ないが、それを教育現場、授業で教えるとはどういうことだろうと深く考える日々となった。そもそも、学生たちは必ずしも編集業や執筆業につきたいと思っているとは限らない。深い挫折や試行錯誤を経ながら三〇年間実践してきた貴重な編集者・執筆業としてのキャリアを学生に教え、実践させることの意味、教員・学生双方の目的を考えた。何を教えるべきなのか。何を実践させるべきなのか。

つまり、実務家の仕事を大学教育の中に落とし込むという「編集」が必要だったのである。

私はまず学生たちを外に連れ出そうと考えた。自分の生きてきた環境だけでは知り得ない「他者」と「社会」との関わりのなかで自分自身を探してほしいと願った。他者や社会の手触りが実感できず、関心を持てない状態で、文芸、芸術を口にすることにどのような意味があるのか、そのような思いが強くあった。文芸、芸術は自己省察を促すものであり、新人の作品が自分自身の内面の「書かざるを得ない」テーマから紡ぎ出されることもある。作者・作品の発達段階としては大変重要なことであることは否定はしない。しかし自己は、他者、社会という自らを写す鏡との相互の関係の中で常に発達していくものである。他者は学生たちの自己概念を必ず発達させてくれる。その他者は、もちろん書物や芸術作品の中にもあるが、リアルな他者の手触り、社会の手触りこそ、不足していたものではないだろうか。

二、授業実践例と考察

（一）書を読んで、街へ出よう

こうして私とゼミ生たちは、二〇一九年度後期から二〇二〇年度前期まで、複数の書物や映画などによるリサーチを経て、街へフィールドワークや取材、インタビューに出かけた。大阪のコリアンタウン鶴橋（大阪市生野区）、京都駅東の同和対策事業の対象となっていた崇仁地区、京都駅南の東九条の多文化共生をテーマとした祭り「東九条マダン」、そのほかにも多くの人や街に出会った。

これらのエリアを選択した理由は、それらが痛みの歴史を背負った街だから

である。文芸、文学は敗者のものである。壊された者が立ち上がるときの勁さにこそ、尊厳があり、それは詩でありことばで文学である。崇仁で街の痛みの歴史を正確に学んだうえで、次の世代の方たちと新しい創造をして街づくりをする方たち。東九条や鶴橋で在日コリアンの文化や祭りを地域に開いていくことで、ともに生きる次世代の多国籍の子どもたちの未来を創ろうとする方たち。彼らのしている活動は、エディターシップにほかならない。そして街の未来デザインをしているという点では、コンサルタントの仕事にも似ている。

痛みの歴史や経験を、繊細に大胆に突き破って表現している方たちと学生たちを邂逅させること。学生たちが街の人たちに受け容れられることで、街の人々とともに学生を育てていきたいと願った。

これらの調査やフィールドワークは、当初インタビュー・取材記事として、大学のウェブ広報誌『瓜生通信』に掲載された。

また、のちに京都芸術大学から特別制作研究助成をいただいて、雑誌『アンデパンダン　文芸×社会』として刊行（二〇二一年一月七日　筆者が発行者）、『ことばラジオ』（京都コミュニティー放送）(1)として放送された。

雑誌『アンデパンダン　文芸×社会』は、学生たちの鶴橋フィールドワークのレポート、映画『パッチギ』の俳優、ヘイトスピーチと闘うライター、チマチョゴリの製作者、東九条マダン実行委員長、崇仁発信実行委員会代表、東大阪国際交流フェスティバル、映画『ニジノキセキ』の監督のインタビューのほか、鶴橋の人物をひとりひとりインタビューした「鶴橋人物列伝」、短歌、映画評、書評、小説、エッセイ、詩などで構成されている。

『ことばラジオ』は、学生たちが鶴橋の子どもたちに案内されてコリアンタウンを歩いた経験、韓流サブカルチャー、屋台、飲食店でにぎわう鶴橋の楽しさと、十分に知り得なかった日韓の歴史や、多国籍の外国籍住民が多数存在する大阪市生野区の話を聴いた体験をトーク番組で構成した。

小学校の教員を退職後、子どもたちの居場所や子ども食堂を運営している方、多文化共生の活動をしているＮＰＯ法人の代表、自治体職員、子育て支援をする市民の方などに実際にインタビューをした経験は、学生たちの視野や考え方をぐんと深め、広めてくれた。

教室内だけで表現するのではなく、大学の看板となる広報誌へ掲載された記事、雑誌編集、放送局でのラジオ放送は、不特定多数の方に言葉を届けることとなる。学生たちは、自分の経験したこと考えたことを言葉として紡ぎ出し、他者、社会に届けるという体験を通して、言葉の強さと可能性を実感した。同時に、言葉とメディアは使い方を誤ると人を傷つけ、差別を再生産するナイフになるという怖さを実感したようである。

実際に社会課題を自己との関わりでしっかりと調査考察し、大学内外の「他者」のお話を聴かせていただき、文章にまとめること、編集し社会に発信することで、言葉・表現の力や責任に気づいた学生たちの人間的成長、実務的成長には目を見張るものがある。

（二）学生たちの記事、作品にみる「気づき」

「刃物となる言葉、平和を紡ぐ言葉 ― 崇仁フィールドワーク」（『瓜生通信』二〇二〇年七月三一日掲載）(2)

崇仁発信実行委員会代表　藤尾まさよさんのご案内で、同和対策事業の対象とされていた京都駅東の崇仁地区をご案内していただき、講演をうかがったあとの記事である。藤尾さんはＮＨＫハートネットＴＶ番組『この町が好きだから ― 京都・崇仁（すうじん）地区 ― 』（初放送　二〇一七年五月一〇日）に出演され、このエリアに移転予定の京都市立芸術大学の学生たちとともに未来の街づくり、地域の関係作りを試みている。藤尾さんたちの活動は、崇仁の歴史やご自身の被差別の体験を若い人たちや街の方たちに伝える仕事である。そして、芸術や表現、対話の力で、困難のあった街と人々の歴史、尊厳を持って立ち上がってきた人間の力を伝え、街の未来の物語を人々とともに紡いでいる ― 実にエディターシップそのものの活動である。実際、藤尾さんは、崇仁実行委員会の代表として、地域発信マガジン『崇仁～ひと・まち・れきし～』という冊子を編集している。

藤尾さんは、一九五一年刊行の『オールロマンス』誌の十月号に掲載された『特殊部落』という小説がきっかけで起きた「オールロマンス事件」の話を学生たちにしてくださった。小説の執筆者は、当時九条保健所で衛生指導をしていた京都市職員、小説の舞台は京都市の東七条。小説内では被差別部落は無法地帯のように描かれていた。この小説の執筆者はのちに、「私たちは今まで特定地区を差別してきたが、なぜ差別をしていたのか人権の勉強の最中考えてみると、それらにはなんら差別されるべき理由がない」と反省文を書いている。

学生のひとりは、これらの話を聴き、

私たちは「意識して正しい情報を取り入れる」ことができているのだろうか。オールロマンス事件は、小説という芸術作品が火種となった事件である。このような痛ましい事件があったということを知ったうえで、私たちはどのような表現ができるのか。差別意識に対し、芸術という分野がどのように作用するのかを考え続けなければいけない。

と記述している。

また藤尾さんは、災害等の混乱時に、言葉による差別が容易に殺人にまで発展することについて話してくれた。例として、関東大震災で「朝鮮人が井戸に毒を入れた」「この地震は朝鮮人が起こしたんだ」という噂が流れ、その言葉を信じた人々が朝鮮人を恐れ、自警団が多くの朝鮮人を殺害してしまった歴史について語ってくださった。

学生のひとりは、

みんなが言っているから、と鵜呑みにしてしまう人々にも非はあるが、非難すべきはその情報を最初に流した者だ。日常の些細な言葉が、何かが起こったときに大きな力となり、命までをも奪ってしまう。言葉は時に人を殺す刃物になってしまう。その刃物を学んでいる私たちにとって、この構造を重く受け止めねばならない。（中略）

すべての始まりは、自分がどう捉えるのか。自身の言動が今の社会、これからの社会にどう繋がっていくのか。そこに意識を向け働きかけていくことが大切なのだ。

平和を想う芸術という分野を学ぶにあたって、そのようなことを誰もが忘れてはならない。その意識が薄れた瞬間に芸術という分野は、非常に鋭い刃物へと姿を変えてしまうだろう。他者を想い、優しい言葉で世界が溢れたのなら、芸術はきっと今以上に良いものへと姿を変えるはずだ。

と記述している。

藤尾さんを現在の活動に駆り立てたのは、藤尾さんがＰＴＡ会長をしていた中学校の一五歳の在校生の言葉だった。卒業生から、高校に進学し、出身地域や学校について差別的なことを言われた話を聞いたとき、

「僕らがどんなに頑張ってもあかんのや。どうせ社会は認めてくれへんねや」

と彼は言ったという。

藤尾さん自身が若いときに感じていた痛みを、子どもたちの世代が繰り返している。それはあってはならないことだと藤尾さんは言う。

藤尾さんは学生たちに伝えた。

「大切なことは、ひとつの物事に色々な視点をもち、あなたたちひとりひとりが自分の頭でしっかりと考えることです」

学生のひとりは、藤尾さんのことばを受け、このように書いている。

私たちは何を書くのだろう。小説、詩、エッセイ、インタビュー記事。様々なことについて、私たちは様々に言葉を紡ぐ。一文字一文字に心を遣い、時にはたった一語に多くの時間をかけ、私たちは言葉を紡いでいく。その営為に自分の奥底への深い眼差しは必要不可欠であるし、ましてや他人への思いやりはなくてはならないものだと思う。

芸術が人に優劣をつけない平和を愛する学問である限り、私たちは誰かを悲しませないために、他人が無意識に人を傷つけないために、他者への思いやりと正確な知識をもって書き続けなければならない。

藤尾さんは、学生が執筆した記事の公開前に、幾度も文言を一言一言チェックして、学生たちのなかにある無自覚な偏見も見逃さず指摘してくださった。学生たちは、藤尾さんが差別を体験をした当事者として、言葉の怖さや影響力を知り尽くしていること、どれだけ正確な言葉を選ぼうとしておられるかという緊張に向き合うことにもなった。

藤尾さんは、学生たちを丁寧に指導してくださり、時に叱り、同じことを繰り返さないように伝えてくださった。

「子どもがひとりが育つには、ひとつの村が必要だ」というアフリカのことわざが示すように、私はゼミの学生たちを、地域、「村」の人々に託してみた。それは、人々の生活の路地や心の襞まで分け入るような関わりだったが、その路地から、学生たちは人や街や芸術、文芸、言葉についての視座を深めることと

なった。

紙幅が限られているので、ひとつの記事からの例示としたが、大学の外の世界と人々に真摯に向き合い、表現する場を得た学生たちの伸びしろは驚嘆すべきものだった。人や社会を理解するために多くの本を読み、映画を鑑賞し、初めてのインタビュー、初めての執筆、編集、校正、組版デザインを体験した。これらは実際の編集者・取材執筆者がしていることと相違ない。学生たちはどんどん知的にも人間的にも成長し、魂を深くして、言葉と他者と自身に自覚的に向き合うようになった。

三、結び

試行錯誤で始まった二〇一九年度からの授業実践で培った問題意識は、行き止まりの資本主義、環境破壊、格差問題、SDGsの「持続可能な開発目標」に学生たちとともに向き合うことにつながっていった。

これからの地球環境のなかで、どのように人と社会と向き合い生きていったらよいか、社会に出ることが怖いという学生たちにどうしたら希望を見いだしてもらうことができるか、その模索の旅だった。学生たちをフィールドワークに連れ出すと、あとは自分の力で出会いを深め、話を聴き、子ども食堂を手伝い、一緒に地域の畑を耕し、インタビューや取材を申し込んでくるようになった。痛みの歴史を背負う街で、力強く未来の物語を紡ぐ人々と出会うことは、学生たちが自身の苦しみに向き合い越えていくきっかけをつかむことに繋がったこともあったようである。

こうして、とまどいからスタートしたエディターシップ、「編集ゼミ」は、学生の内発的な問いに社会性を持たせるために、活動テーマのひとつをSDGsの課題解決という社会的文脈に位置づけた。二〇二〇年度～二〇二二年度はSDGsの課題から年度ごとにテーマ設定をして、聞き書きや取材によるアクチュアルな文芸作品や記事を創作し、雑誌や書籍の編集制作、ラジオドラマの制作による発信を試みる。ことばや芸術の力によって社会を底から耕し未来を創出する、永遠に未完のプロジェクトである。

この間、二〇二〇年度はコロナ禍に見舞われた。学生たちはコロナ禍で人々がどのように生活や仕事をしているか、表現の形はどう変化しているかに関心をもち課題設定をした。コロナ禍で発想を転換させたくましく生きる人々、つながりを大切にして朗らかに生きる人々に取材をしてきた。学生たちは他者のインタビューを通して生きることに真摯に向き合い、人びとの逞しさとあたたかさ、楽観性に出会ったようである。

二〇二一年度は、ジェンダー平等、子どもの貧困、教育問題、戦争と文学など、学生たちの問題意識から企画が立ち上がった。リサーチと取材執筆がスタートしている。出版の仕事は、そもそも編集者が企画を立てるところからスタートする。それは文芸の分野であれ、それ以外であれ、社会のアクチュアリティーに深く関わっている。内面の課題や孤独をつきつめ、社会的な文脈に落とし込んだとき、人は他者という社会の中で生きていくことができる。現在、企業もSDGsや、社会課題の解決をビジネス課題にしている。学生たちがたとえ編集者にならなくとも、エディターシップを学んだこと、自ら課題設定、企画化し、創作、編集をしたことは、社会を耕す仕事につながるはずである。

二〇一九年度に授業実践をした学生たちのなかには今春卒業し、作家デビュー、編集制作プロダクションへの就職、CM制作会社への就職など、ことばや表現に携わる仕事からキャリアスタートをした方たちがある。学生たちの進路は様々であるが、他者や場にエディターシップ活動で関わったことは、学生たちに新たな志や学習・進学意欲を生み出した。行動することで自己や社会を変えている方たちと学生たちが出会ったことは、社会へ踏み出す勇気、外に開いて表現をしていく勇気につながったようである。

自立というのは、自分の力で歩いていかれるということ。教員としてできることは、実践の場を準備し失敗も自分でさせること。失敗を考察し、失敗について他者にフィードバックしてもらうこと、そうすることによって再び立ちあがる不屈の精神を学習者自身が育成することだ。私はこのことを学生たちによって教えられている。そして学校という場から広い社会に離陸させ、私たちが要らなくなるようにする。若い人たちが自分と他者を信頼し、協働のもとで新しい創出ができることを信じていよう。

人々の物語から歴史を継承し未来を創造しようとすること、言葉や文芸で社会の底を耕すこと、自己は他者との関わりによって編集され完成すること―エディターシップから紡ぎ出された教育である。それは、キャリア教育、文芸表現教育と掛け算となり、多様で無限な効果を生み出していくはずである。

ひとりひとりの学生たちが、エディターシップという活動概念で他者とのつ

ながりや社会に新たな文脈を編み出す未来を楽しみにして、この稿を終える。

註

(1) 『ことばラジオ』(http://radiocafe.jp/200303002/episodes/2020-10-24oa　京都コミュニティー放送)

(2) 「刃物となる言葉、平和を紡ぐ言葉 ― 崇仁フィールドワーク」(『瓜生通信』二〇二〇年七月三一日掲載) https://uryu-tsushin.kyoto-art.ac.jp/detail/645